

中間構文について

西尾 美穂

(人文学部英語英文学教室)

On Middles

Miho NISHIO

Department of English, Faculty of Humanities and Economics

Abstract: In this paper, we investigate the syntactic and semantic properties of the middle construction in English: *the book sells well*. The subject of the middle construction is the patient or the theme argument of the verb and the agent argument is suppressed, but, unlike in the passive construction, the verb is in the active form. The middle construction has a stative, generic (property) reading and implication of agentivity and potentiality. It typically appears in the simple present tense and require a modification (a facility adverb, a modal auxiliary, a contrastive stress, or negation).

The fact that object control verbs and resultative predicates appear in the middle construction indicates that there is a trace in the object position: *the book_i sells t_i well*. The implied agent in the middle construction can control the PRO subject of an adjunct clause, bind an anaphor. Thus it must be present in syntax as an empty category (PRO): *the book_i [_{VP} [_{VP} sells t_i well] PRO]*.

The assumption that English has a zero potential affix and in the middle construction it is attached to the verb in syntax explains these semantic and syntactic properties of the middle construction.

キーワード：中間構文，可能接辞，統語的接辞添加

0. 序

英語には、本来は他動詞でありながら、(1)に示すように、自動詞的構文にも用いられる動詞がある。

- (1) a. The door doesn't lock.
- b. Such houses rent, sell easily.
- c. Ripe oranges peel easily.
- d. The vessel steers with ease.
- e. These colors do not wash well.

- f. This cloth doesn't cut to advantage.
- g. This cake doesn't break evenly.
- h. This paper doesn't tear straight.
- i. This wood doesn't split straight.
- j. The bread doesn't bake well in this oven.

このような動詞は中間動詞 (Middle Verb) と呼ばれ、形態的には能動形でありながら、受動的な意味を持つ、(1)の例はそれぞれ(2)のように言い換えられる。

- (2) a. The door can't be locked.
- b. Such houses can be rented, sold easily.
- c. Ripe oranges can be peeled easily.
- d. The vessel can be steered with ease.
- e. These colors cannot be washed well.
- f. This cloth cannot be cut to advantage.
- g. This cake cannot be broken evenly.
- h. This paper cannot be torn straight.
- i. This wood cannot be split straight.
- j. This bread cannot be baked well in this oven.

((1), (2) Curme §.440)

本稿では、中間構文の統語的・意味的特性を考察し、その派生方法を検討する。

1. 中間構文の特性

(i) 中間構文は動作主 (Agent) の存在を含意する。Fellbaum (1986, p. 11) は、(3 a)は(3 b)あるいは(3 c)のように言い換えられるとしている。

- (3) a. This flashlight plugs in easily.
- b. Anybody can easily plug in this flashlight.
- c. This flashlight can be plugged in easily (by anybody).

上の言い換えに示されているように、中間構文において含意される動作主は不特定 (nonspecific) である。

中間構文の動作主は、受動文と異なり、前置詞 by によって導かれる付加詞に現れることはない。

- (4) a. The paint was sprayed on evenly by painter.
- b. *The paint sprayed on evenly by painter.
- (5) a. The car is handled easily by driver.
- b. *The car handles easily by any driver.

(Fellbaum 1986, p. 2)

ただし, (6)に示すように, 前置詞 for に導かれる付加詞には現れることができる。

- (6) a. That book read quickly for Mary.
b. No Latin text translates easily for Bill.

(Stroik 1992, p.131)

(ii) 中間構文は, 主語の特性 (property) を記述する。したがって, Fellbaum & Zribi-Hertz (1989, p. 23) に指摘されているように, 出来事 (event) の解釈と結び付くような修飾語とは共起しない。

- (7) a. Greek translates easily.
b. *Greek translates with a dictionary.
c. *Greek translates better in the morning.

Keyser & Roeper (1984, p. 385), Roberts (1986, p. 195) は, 中間構文は, 一般に, 副詞, 対照の強勢, 助動詞, 否定など, 何らかの修飾要素を要求することを指摘している。Fellbaum & Zribi-Hertz (1989, p. 24) はこれを, 中間構文が主語の特性を述べるものであるため, 他との分類効果 ('classifying' effect) を持つためと説明している¹。

- (8) a. Bureaucrats bribe *(easily).
b. The wall paints *(easily).
c. Chickens kill *(easily).
d. The floor waxes *(easily).

- (9) a. Bureaucrats BRIBE.
b. The floor might wax.
c. This bread doesn't cut.
cf. *This bread cuts.

(iii) Keyser & Roeper (1984) は, 中間構文が出来事ではなく状態 (state) を表す証拠として, (11)-(14)に示されるように, 特定の日時を表す表現と共起しにくく, 呼格つき命令文, 進行形, 知覚動詞の小節補部に現れないことを挙げている²。

- (10) a. The wall paints easily.
b. Chickens kill easily.
c. The floor waxes easily.

- (11) a. ?Grandpa went out to kill a chicken for dinner, but the chicken he selected didn't kill easily.
b. ?If it hadn't been for the wet weather, my kitchen floor would have waxed easily.

- (12) a. *Wax, floor!
b. *Kill, chicken!

- (13) a. *Chickens are killing.
b. *The walls are painting.
- (14) a. *I saw the floor wax easily.
b. *I saw chickens kill quickly.

2. 中間構文の派生

2.1. 中間構文の動作主

中間構文は(3b, c)の言い換えに示されているように動作主の存在を含意する。しかし、受動文と異なり、(4b), (5b)に示されるように、by 動作主句として現れることはできず、また、(15), (16)に示すように、動作主指向副詞 (agent oriented adverb) を認可したり、不定詞目的節 (infinitival purpose clause) をコントロールすることもできない。

- (16) a. *The book sold voluntarily/deliberately.
b. *Your books read intentionally.
- (17) a. *This corn grinds easily to feed the chickens.
b. *The book sold to make money.
c. *Those chickens killed to make money.

(Roberts 1986, Hale & Keyser 1987, Stroik 1992)

以上の事実は、一見したところ、中間構文の動作主が統語的に具現化されないことを示すように思われるが、Roberts 自身が指摘しているように (1986, p. 71, p. 101), 動作主指向副詞や不定詞目的節は、動作主と出来事の両方を要求する。

- (18) a. *The ice deliberately melted.
b. *John intentionally knew the answer.
- (19) a. *The crystal resolved to annoy the physicist.
b. *John knew the answer to impress everyone.

§.1 (ii), (iii)で見たように、中間構文は主語の特性を記述し、状態的意味を持つものであるから、(16), (17)が許されないのは(18b), (19b)が許されないのと同様に、出来事を欠いているためとも考えられ、動作主がないためとは言い切れない。

また、(20), (21)のような例は、中間構文の動作主が束縛やコントロールなどの文法関係に関与することを示している。

- (20) a. Books about oneself never reads poorly.
b. Letters to oneself compose quickly.
- (21) a. Most physics books read poorly even after reading them several times.
b. Potatoes usually peel easily after boiling them.

(Stroik 1992)

Stroikは(20), (21)においては, 中間動詞の外部 Θ 役割 (Agent) を担う空範疇 PRO が照応形の先行詞や付加詞節の PRO 主語のコントローラーとして働いていると主張する. この PRO は, Larson (1988) の項降格原理 (Principle of Argument Demotion) に従って VP の付加詞の位置に生じる.

(22) 項降格原理

A が X^k によって付与される Θ 役割ならば, A は (随意的に) X^k の付加詞に付与されてもよい.

このように仮定すると, PRO や顕在的な外部項と素性が適合しない照応形が許されないことも説明できる.

- (23) a. Books about oneself/*herself/*himself/*themselves never read poorly.
b. Books about *oneself/herself/*himself/*themselves read quickly for Mary.

ただし, なぜ中間動詞の外部 Θ 役割は降格されねばならないのかという疑問が残る.

Roberts (1986) に従って, 中間動詞は状態化 (stativize) され, Infl と同一指標付けされないために主語に Θ 役割を付与せず, 目的語に格を付与しないというなら, 外部 Θ 役割を付与し, 目的語をとる状態動詞 (know, consider) の存在が問題になる³.

2.2. 中間構文のNP移動

Stroikは(24)は(25 a)のD構造から, NP移動によって派生され, (25 b)のようなS構造を持つと主張している⁴.

- (24) Books about oneself never read poorly.
(25) a. [_{IP} e_i' I_{VP} [_{VP} never read books about oneself poorly] PRO]]
b. [_{IP} [books about oneself]_k [_i' I_{VP} [_{VP} never read t_k poorly] PRO]]]

このようなNP移動による分析は, 中間動詞の後ろに痕跡 ((25 b)の t_k) が存在する証拠がいくつあることにより支持される. その一つは, 目的語コントロール動詞が中間構文に用いられることである.

- (26) a. I trained my dog to heel.
b. Dogs train to heel easily.

(Hale and Roeper 1987, p. 39)

(26 b)においては, train の後ろに残された痕跡が不定詞節の主語 PRO をコントロールしていると考えられる.

- (27) Dogs_k train t_k [PRO_k to heel easily].

さらに, 中間構文には, 結果の述語 (resultative predicate) も現れる.

- (28) a. New seedlings water flat easily.
 b. Those cookies break into pieces easily.
 c. My socks won't scrub clean easily.
 d. Permanent press napkins iron flat easily.

(Carrier and Randall 1992, p. 191)

(29)に示すように、結果の述語は目的語（あるいは目的語の位置にある痕跡）を叙述し、非能格動詞の主語を叙述することはない。

- (29) a. Jesse shot him dead.
 b. The icecreami froze ti solid.
 c. *I danced/laughed/worked tired.

もし、(28)の主語も動詞の後ろに痕跡を残して移動してきたものであり、結果の述語はその痕跡を叙述しているとすれば、結果の述語はD構造の目的語しか叙述しないという一般化に反しない。

- (30) The new seedlings_i [VP water t_i flat easily].

2.3. 中間構文の意味

§. 1の(7)では、中間構文が出来事の解釈を引き起こすような修飾語とは結び付かないことを見た。StroikはRobertsに従い、中間動詞はInflと同一指標付けされず状態化されているしているが、Fellbaum & Zribi-Hertzは、英語の中間構文が、(31)と(32)を比較してみるとわかるように、There挿入に関して、状態を表す述語のなかでも特に特性(property)を表す述語と同じように振る舞うことを指摘している。

- (31) a. *There wash many shirts easily.
 b. *There translate many Greek texts.

Cf.

- (32) a. There were several people sick at the time.
 b. *There were several shirts washable in the store.

(Fellbaum & Zribi-Hertz 1989, p. 27)

これに対して、フランス語では(33 b, c)や(34)が許され、中間構文が出来事の解釈を許すことを示している。

- (33) a. Le grec se traduit facilement.
 b. Le grec se traduit avec un dictionnaire.
 c. Le grec se traduit mieux le matin.

(ibid. p. 10)

Cf. (7)

- (34) a. Il se lave beaucoup de chemises dans cette blanchisserie. it/there REFL wash many shirts in this laundry
 b. Il S'est traduit (facilement) beaucoup de textes grecs à it/there REFL has translated easily many texts Greek at cette époque.
 that time

(ibid. p. 25)

Keyser & Roeper (1984, p. 406) では、英語の中間構文にも、ロマンス語の中間構文と同様に接語 (clitic) が関与している (抽象的si接語が格と動作主⊙役割を吸収する) としているが、それでは上で見たように、英語の中間構文が特性 (property) の解釈しか持たないのに対して、フランス語の中間構文は出来事 (event) の解釈も許すという違いが捕らえられない⁵。

2.4. 日本語の可能文と中間構文⁶

2.4.1. 日本語の可能文

日本語の可能文は、動作主外部項を持つ動詞に接尾辞「レ/ラレ」を添加して作られる。動作主が主語として現れる能動可能文と主題 (theme) が主語として現れる受動可能文がある。能動可能文の派生においては動詞の項構造 (⊙格子) に変化は生じない。

- (35) a. 能動他動可能文
 加藤さんがロシア語を読める。
 (yom-re-ru)
 b. 能動自動可能文
 この子供はもう歩ける。
 (aruk-re-ru)

受動可能文の派生においては、他動詞の動作主は内部項に降格 (demotion) され、主題は外部項に昇格 (promotion) される。降格された動作主は与格小辞「ニ」で表示される。

- (36) a. 他動詞文
 子供達がまきを割った。
 (war-ta)
 b. 可能文
 子供達にもまきが割れた。
 (war-re-ta)

非状态的 (non-stative) 動詞に添加されて「結果の状態」(resultative state) を表す接尾辞「テイル」を許さないことから、可能文は状态的であることがわかる。

- (37) *子供達にもまきが割れていた。
 (war-re-te-i-ta)

2.4.2. 日本語の中間構文

日本語の中間構文は [Agent, Theme] という Θ 枠 (Θ -grid) を持つ他動詞に接尾辞「レ」, 「アル (-ar)」を添加して作られる。接尾辞「レ」, 「アル」の添加によって, 動詞の Θ 枠は [Theme, (Agent)] に変化する。動作主は付加詞 Θ 役割として Θ 枠の中に残っているが, 語彙的に具現化されることはない。主題は昇格されて主語位置に現れる。

- (38) a. このまきはやすやすと割れる。
(war-re-ru)
b. 努力すれば莫大な金が集まる。
(atum-ar-ru)

中間構文は動作主と可能性 (potentiality) を含意する。

- (39) a. この縄はひっぱればほどける。
(hodok-re-ru)
b. この門は押したぐらいでは閉まらない。
(simar-ana-i)

接尾辞「テイル」の添加が許されないことは, 中間構文が状態を表わすことを示す。

- (40) a. この縄はひっぱればほどけている。
(hodoke-te-i-ru)
b. この門は押したぐらいでは閉まっていない。
(simar-te-i-na-i)

井上 (1992, § 4.2) の分析では, 「レ」中間構文は可能接辞「レ」の添加によって派生されるとしている。受動可能文では動作主は内部 Θ 役割に降格され「ニ」の名詞句に具現化される。この「ニ」名詞句が不定 (indefinite) で省略された場合に中間構文が生じる。この分析を採れば, 中間構文の状態性, 動作主/可能性の含意だけでなく, 中間構文と「ニ」動作主を持たない可能文が同形であることも説明できる。

また, Θ 枠 [Theme, (Agent)] において () で示される付加詞 Θ 役割が受動文においては語彙的に具現化され得る (「子供に枝がおられた」) が, 中間構文では語彙的に具現化されないことがない (「子供にも莫大な金が集まる。」) のは, 受動文が統語的に派生されるのに対して, 中間構文は語彙的に派生されるからであるとしている。

(41)のように, 接尾辞を伴わない自動詞が中間動詞としての解釈を許すことがあるが, ゼロ可能接尾辞の可能性も示唆されている。

- (41) a. この台にマイクが二本立つ。
b. 君の本箱は簡単に動く。

2.5. 英語の可能接辞と中間構文

§. 1 の (2) や (3 b, c) の言い換えには法助動詞 can で表されているが, 英語の中間構文も可能性

を含意する。Poutsma (1926, XLVI 33) でも中間動詞は able/ible 形容詞の意味を持つと述べられている⁷。Fabb (1984, p. 220) は(42)のように able 形容詞が結果の述語を従えている例を示して、統語的に添加される接尾辞 -able もあると主張している。

- (42) a. Trout_i is hammerable t_i flat.
 b. Beef_i is eatable t_i raw.
 c. It_i is burnable t_i to ashes.

結果の述語は内部項 (D 構造の目的語) しか叙述しないとすれば、(42)における移動は able 形容詞の後ろには痕跡を残す統語的移動でなければならない。

日本語の自動詞の例(41)がゼロ可能接尾辞によって説明されるとすれば、英語にも -able に対応するゼロ可能接辞があるとしてもよいであろう。日本語の「レ」中間構文の場合と同じように、可能接辞の添加によって派生されるとすれば、英語の中間構文の状態性、動作主/可能性の含意を説明することができる。ただし、日本語の中間構文とは違い、英語の中間構文には for に導かれる動作主が現れ (§.1 (6)), また、目的語コントロール動詞が用いられたり、結果の述語が現れたりする (§.2.2 (26, 27, 28, 30)) ので、ゼロ可能接辞は統語的に添加されるのでなければならない。

(注)

1. ベンキを塗れない壁というものがあるとすれば、(i)のような文も許されると言う。
 (i) Does this wall paint?—Yes, this wall paints.
 (Fellbaum & Zribi-Hertz p.8)
2. (i) The book is selling like a hot cake.
 (ii) The orange peeled easily.
 (iii) The book read well in the 1820's.
 のように進行形や過去時制に現れることもあるが、そのような場合でも主語の特性を述べていることに変わりはない。(i)は一時的な特性、(ii, iii)は過去の一定期間における特性を表す。
3. Roberts (1986, p. 219)
4. (25)の I は Infl を表す。
5. 大庭 (1993) では、イタリア語の接語は Infl に現れるのに対して英語の接語は V に現れるとして、接語の位置の違いによってイタリア語の中間構文と英語の中間構文の違いが説明されている。
6. 以下の日本語に関する記述は井上 (1992) まとめたものである。
7. 接尾辞 -able は他動詞に添加されて「~できる (that can be --ed:washable=that can be washed)」という意味の形容詞を作る。

[参考文献]

- Baker, Johnson, Roberts (1989) "Passive Argument Raised," LI 20. 219-251.
 Carrier & Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," LI 23. 173-234.
 Curme (1931) *Syntax*, Boston: D. C. Heath & Co.
 Fabb (1984) *Syntactic Affixation*, Ph.D. dissertation, MIT.
 Fagan (1988) "The English Middle," LI 19. 181-203.
 Fellbaum (1986) On the Middle Construction in English. Bloomington, IN: Indiana University Linguistic Club.
 Fellbaum & Zribi-Hertz (1989) The Middle Construction in French and English, Bloomington, IN: Indiana University Linguistic Club.
 Fiengo (1980) *Surface Structure*, Cambridge Mass.: Harvard University Press.

- Hale & Keyser (1986) Some Transitivity Alternations in English, Lexicon Project Working Paper 7, Center for Cognitive Science, MIT.
- (1987) A View from the Middle. Lexicon Project Working Paper 10, Center for Cognitive Science, MIT.
- (1988) Explaining and Constraining the English Middle," in Tenny (ed) *Studies in Generative Approaches to Aspect*, Lexicon Project Working Papers 24, MIT.
- Inoue (1992) "On Middles," 『言語理論と日本語教育の相互活性化』平成3年度科研報告書
- Jaeggli (1986) "Passive," LI 17. 587-622.
- Keyser & Roeper (1984) "On Middle and Ergative Construction in English," LI 15.3, 381-416
- Larson (1988) "On the Double Object Construction," LI 19. 335-391.
- Poutsma (1926) *A Grammar of Late Modern English*. Noordhoff, Groningen.
- Roberts (1986) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*. Dordrecht: Foris.
- Stroik (1992) "Middles and Movement," LI 23. 127-137
- Tenny (1987) *Grammaticalizing Aspect and Affectedness*. Ph.D.dissertation, MIT.
- 大庭幸男 (1993) 「英語の中間構文について」 『英語青年』139. 344-346

平成5年(1993)9月28日受理

平成5年(1993)12月27日発行